

郷土摂津

いにしえ通信

第47号 平成14年3月1日

発行 摂津市教育委員会 生涯学習部生涯学習課

〒566-8555 摂津市三島一丁目1-1

TEL (06) 6383-1111 TEL (0726) 38-0007

ホームページアドレス <http://www.city.settsu.osaka.jp/>

3月 彼岸 第12回 わがまち ちょっと昔の生活

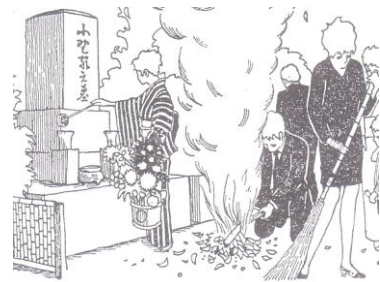
彼岸 春と秋、昼夜の時間が同じになる春分の日、秋分の日を中日として、それぞれの前後各3日間の計7日間を彼岸といいます。向こう岸の彼岸は、極楽浄土で、先祖の霊が安んでおられ、こちら岸は、生老病死がある娑婆の世界を意味する仏教用語です。

この思想は、インドの巡回説教僧が説いてまわったと言われますが、太陽神を崇拝する日本の風土と密着し、先祖まつりとして盛んになったと思われまます。お盆と異なり、気候の変化を肌で感じつつ仏壇を飾りお墓まいりをするのが一般的です。

彼岸会 寺院ではこの時期に彼岸会を営みます。お寺参りやお墓参りをして、亡き人の霊を供養し、彼岸へ到達するたよりを得ようと念ずるのです。

彼岸のお供え「ぼた餅」 彼岸のお供えとして、「ぼた餅」があげられます。蒸した粳（うるち）餅半々のにぎり飯をこし餡（あん）で包んだもので、秋の彼岸はつぶ餡にしたもので「おはぎ」といいます。春は牡丹、秋は萩の花が咲くのでこの名前がついたようです。

ぼた餅はおはぎより、やや大きくこし餡のため、ぼってりとしています。



おわりに 今月号で「わがまち・ちょっと昔の生活」を終了します。第36号の山行きにはじまり、今月号の彼岸まで全12回で、身近でなつかしい生活について紹介してきました。生活や風習は時代によって変わるもので、その記憶は風化していくものです。私たちは風化しつつある「ちょっと昔の生活」も庶民の歴史として後世に伝えていかなければなりません。

次号より新シリーズ
「淀川を往来した船」
がスタートします

江戸時代の大坂は全国の物流の拠点でした。淀川には三十石船、伏見船などが盛んに往来し、船運は活発になります。次号から市域とゆかりの深い淀川と往来した船について紹介していきます。

このコーナーでは、新しい史料の発見で、明らかになりつつある鳥飼なすの由来をシリーズで紹介します。

パート3 鳥飼なすの由来について

鳥飼なすへの品種改良 鳥飼なすがどのような経過で栽培されるようになったかは、前号の第43号と第44号で紹介しました。ここで簡単に振り返っておきます。

江戸時代の大坂では、「天下の台所」と称された天満市場に全国からの物産が集積され、取引されていました。そして、市場に近い農村からは、野菜などの青物が供給されていたのです。淀川沿岸にあった農村では、農産物を市場まで運ぶために、河川を利用していました。特に、味舌浜では淀川・安威川・神崎川の中継地であったため、物産の積み降ろしがさかんに行われ、活況を呈する光景も見られました。

ところが、そのような光景の裏に、運送上の利権をめぐる争いが絶え間なく起こっていたのです。野菜を市場に運ぶにも、様々な利権が障害となって、市場に直接持ち込めませんでした。ただし腐りやすい野菜である「なす・菜類・大根・うり」の四品だけは、1741年、村舟で市場へ直接搬入することを許されました。そこで鳥飼村では、村の貴重な商品作物であるなすの栽培に精力を注ぎ、消費者の好みに合う品種、鳥飼なすを作り出したのです。それができたのも、18世紀に農地の取水・排水施設の整備がおこなわれ、また集約的な栽培技術が開発されていたことによるものでした。

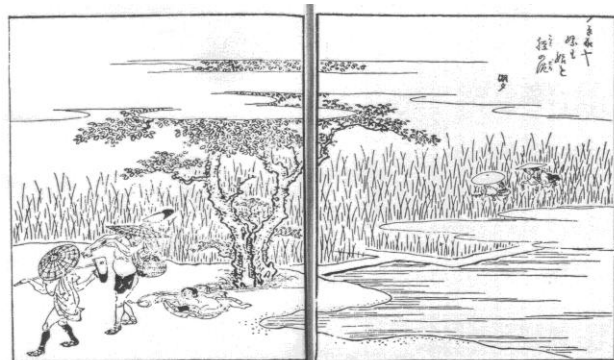
鳥飼なすの栽培の始まり 鳥飼なすが特産物として文献に登場するのは、1836年になってからです。そして、文献で紹介されるには、青物市場で特産品物として認知されていなければなりません。そこで、栽培が始まった時期は、当然それ以前にさかのぼることになります。それではいつ頃から栽培されるようになったのでしょうか。鳥飼村に限らず、大坂全域で農業生産の向上が見られるのは、18世紀の頃です。その頃、栽培技術の進歩も見られ、地域農産物の特産化が図られます。ところが、19世紀前半には、幕藩体制のゆがみが顕著に現れるようになります。掇津市域では、各藩の複雑な入り組み支配が障害となって、低湿地であったこの地域の治水事業が停滞します。そのため、淀川・安威川の川底が浅くなって、河川のはんらんがしばしば起こり、村が貧しくなっています。

このように19世紀に入ると、それ以前の生活状態を保つのが精一杯となり、品種改良をするような余裕をなくしてしまいます。そのような条件を考えあわせると、鳥飼なすの栽培が始まった時期は、遅くとも18世紀末にまでさかのぼるものと思われる。

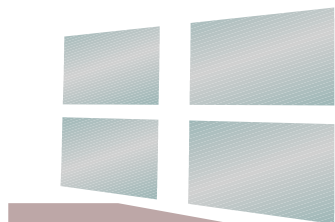
このように推定すると、その栽培が始まってから、少なくとも約200年の年月を経ていることとなります。まさに、鳥飼なすは村民が英知を結集して作り、2世紀にわたって守り育ててきた賜物なのです。

(つづく)

寄稿 鳥飼新町在住 菅 富士夫氏



↑当時の耕作風景「掇津名所図会巻之五」より



郷土史コーナー

意外と身近な郷土の歴史を紹介していきます。

味生(あじふ)の歴史

大正から昭和初期の重化学工業の進出

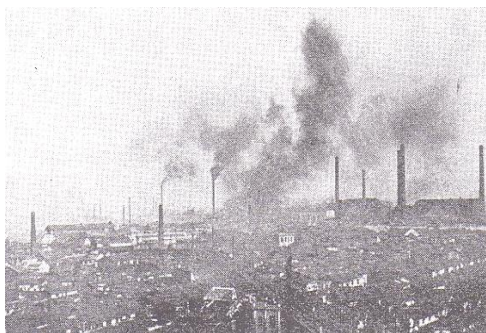
わが国は、第1次世界大戦中、思いがけない好景気に恵まれて、繊維工業をはじめ重化学工業もかつてない発展をとげました。ヨーロッパの主戦場から遠く離れていたため、諸外国から軍需品の注文が殺到し、また欧米諸国の市場であったアジア諸国へ進出していきました。国内一般に非常に活況を呈していきます。ところが、大正7年(1918)11月に休戦条約が成立しますと、たちまち戦後不況に見舞われます。翌8年6月にベルサイユ講和条約が調印されると、一時的な「カラ景気」も見られますが、9年には反動的な恐慌に襲われます。そのうえ、12年9月1日の関東大震災の打撃も加わって、慢性的な不況に陥ったまま、大正から昭和へ時代は移っていきます。

大戦後に不況の中においても、大阪の工業は全国第一で、林立する煙突から吐き出す煙は大阪の空をおおっていました。日本中が慢性不況下の大正14年には、大阪港の貿易は開港以来の最高を記録します。このような経済の発展が地方の人々を大量に吸収し、大阪の人口は異常なまでに膨張します。

大正14年4月には、大阪市は隣接44か村を一挙に編入し、人口は214万4千804人を数え、東京をしのいで日本第一位(世界第6位)の大都市となりました。大阪市民は「煙の都」「大大阪」と誇らしげに呼ぶようになりました。しかしその反面、煤煙・騒音・水質汚染などの公害がようやく問題になりはじめてきました。大阪市の繁栄と膨張、それに伴う郊外交通機関の発達、耕地の住宅地化・工場化を促していきます。

摂津市域へ重化学工業の工場が進出する先駆をなしたのは、昭和5年に操業を開始した大阪セルロイド加工株式会社でした。同社はもともと、大阪市内東部の大今里(東成区)に工場を持っていましたが、周囲の市街地化により、移転することになりました。そこで同社は神崎川沿いで豊富な水が得られ、当時ほとんど人家のなかった旧味生村大字別府に注目します。大阪セルロイド加工株式会社は、工場敷地自体はあまり大きくなく、景観的には大きな変化をもたらすものではありませんでした。しかし当事純農村であった味生村にとって、同社からの税収の増加を含め村全体の生産構造のうえに、大きな変革になりました。昭和5年の味生村の生産総価額によれば、工産総価額は、従来上位を占めていた農業物総価額の倍を超え、生産総価額の66.8%に達しています。

このような工場の需要性の認識が昭和7年の工場誘致運動や12年の工場開設奨励規程の制定で工場の進出へとつながっていきます。



←煙の都大阪

第12回

埋もれた
撰津市の歴史

発掘調査で明らかになっていく撰津市の埋もれた歴史をシリーズで紹介していきます。

平成12年度
蜂前寺跡
2次調査

土師器(はじき)皿について 今回の発掘調査では、比較的多量の土師器皿が見つかりました。土師器皿とは、素焼きによる軟質の土器の中で扁平な器のことを言います。同様のものを土師質土器やかかわらけと呼ぶ研究者もいます。これは古墳時代から奈良・平安時代頃まで作られた土師器とそれ以降(中世)の土器について、技術体系が異なる点を重視し区別しようとする考えからです。

今回は土師器という表現を用います。

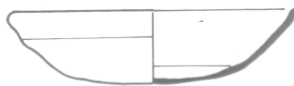
この土器の研究は古く、江戸時代には陶工が京都の土師器皿の生産地を訪れた際の見聞記などが残っています。しかし本格的に研究が始まったのは、1970年代になって都市遺跡が本格的に発掘調査された頃です。発掘調査件数の増加から多量の土器資料が得られ研究が飛躍的に進みます。

土師器皿の変遷 今回の発掘調査では京都産の土師器皿が多く見つかりました。京都では、都市中心部である洛中では作られず、「深草」「栗栖野」「嵯峨」といった洛外が生産の場だったようです。

生産地だけでなく胎土(粘土の種類)、焼成、色調、成形方法などから10~16世紀までの詳細な分類が行われています。特にこの土器は口縁部(皿の上端)の仕上げにその時代の特徴が見られます。この特徴から右図のような編年作業(土器の形の変遷と年代の決定)が行われ、遺跡の年代を計るものさしとして重要な遺物と言えます。

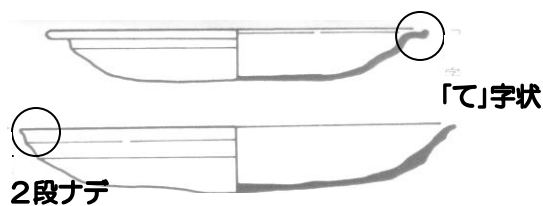
担当 (伊部)

13世紀後半から15世紀後半は深身になり、底部が突出した「へそ皿」も見られます。

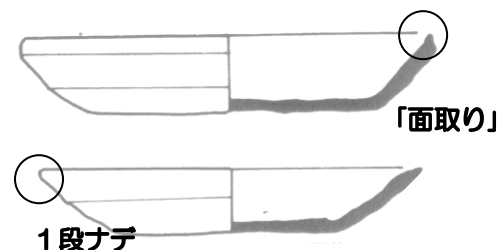


土師器皿の形の変遷

土器を横から見た図です。左半分は外面、右半分は内面を表現しています。



10世紀後半~12世紀中頃は口縁部を「て」字状にしたものや2段ナデを施したのが見られます。



12世紀中頃から14世紀前半頃は口縁部に「面取り」を施し、2段ナデから1段ナデに変化していきます。